

<http://npo-icas.com/>

★★

巻頭言 深月ユリア（フリージャーナリスト）

真逆な性格の石破総理とトランプ氏、石破総理は「天命」を果たせるのか

★★

【石破政権の強さ「総理は天命」】

11月11日に行われた首相指名選挙で第103台内閣総理大臣に指名された石破茂首相。

大苦戦となった原因は先の総選挙にある。自民・公明両党が獲得した議席は215席。15年ぶりに目標としていた過半数の233席を割った。

大物の落選も目立った。牧原秀樹法務大臣（53）、小里泰弘農林水産大臣

（66）ら閣僚のほか、総裁選で石破茂首相を支援していた元防衛庁長官の衛藤征士郎氏（83）も落選するなど、石破首相には大きな痛手となった。

自民党から流れた保守層は国民民主党、日本保守党などに投票したとみられ、今回、日本保守党が初の議席を獲得した。

「自民党の惨敗」ともいえる選挙結果は自民党内で石破首相に対する批判を招いた。「首相辞任になるのでは」と複数のメディアが報じる中でも、石破首相は踏ん張ることが出来た。

そして、11月11日月曜、首相指名選挙後に行われた記者会見において、記者団の質問に対し、少数与党となった結果について、石破首相は「ある意味で、このような状況というのは、民主主義にとって望ましいことかもしれません」

「与党が過半数を割ったことは望ましいと申し上げているのではなくて、より議論が精緻になるけどだと思っております」と回答した。

つまり、民主国家の基本構造として一党独裁ではなく、多様な議論が行われることだ。しかし、与党が過半数の議席を取得すると、与党単独で審議を打ち切り採決ができる「強行採決（与党単独採決）」が出来る。

「安倍一強」だった第一次安倍政見・第二次安倍政見あわせて50回ほど行われた。

「悪夢の民主党政見」といわれる民主党時代にも、6年4カ月の間に強行採決は27回も行われた。

強行採決は迅速な政策決定が出来るが、「数の横暴」だと批判されている。権力による自身の保身を優先する議員からすれば、石破総理の主張は無意味な戯れ言でしかないだろうが、誰に何を言われようが、民主主義の理念を重んじる石破首相の姿勢は類いまれなる強さを感じる。

石破首相は総裁選以前に出版した「保守政治家 わが政策、わが天命」(講談社)で「もし私が首相になることがあるなら、自民党や日本が大きく行き詰まったときではないか。天命が降りない限りあり得ないだろう」という思いを記している。

天命とは、神から与えられた宿命で、石破首相はキリスト教・プロテスタントの信者である。

何も信じる宗教や哲学・倫理観がなく、現実的な金銭や利権に執着する政治家に比べ、「人類は努力して善行を積まなければならない」「この世でどんなに苦勞しても、善行を行えば天国に行ける」と考える傾向があるのかもしれない。

【トランプ大統領再選の背景と激動する世界情勢】

米国では激しい選挙選を経て、ドナルド・トランプ氏が時期大統領に選出された。直前まではカマラ・ハリス氏と接戦だと報じられていたが、226票獲得したハリス氏に対して、トランプ氏は312票も獲得したので「圧倒的勝利」だといえよう。トランプ氏が勝利した理由について、現地取材した記者によると、「バイデン氏が撤退しハリス氏が出馬するのが遅すぎた。民主党内で予備選などを行い、政策の議論を深め、経済政策などをもっと固めるべきだった」という。「ハリス氏はバイデン政権のすげ替えで、ハリス大統領になっても何も変わらないだろう」という主張も目立ったようだ。

バイデン政権時代に、ウクライナ、ガザ両地域で戦争が勃発し、未だに収束の目処がたたない。

バイデン政権の経済政策に対する不満も膨れ上がっている。

アメリカの経済状況は日本や他の先進国と比べて相対的には良好だが、11月始め発表に出された雇用統計では新規雇用が僅か12000人と低調で(良好な時は20万人ほど)で、所得の格差も広がっている。そんな経済不安が、不法移民に対する排他的な感情を助長している。

2025年1月20日に新大統領の就任式が行われるが、このまま何事もなく、トランプ氏が大統領に就任すれば、世界は大きく変わり、日本は苦勞することだろう。ウクライナ人の国際政治学者、アンドリー・グレンコ氏によると、「これからの4年間はアメリカは国際舞台から消え、孤立主義に陥ります。トランプは国際問題に関心がないので、ロシア、中国、北朝鮮の拡張主義を抑止しな

くなるでしょう。しかも、トランプは周囲の意見に耳を傾けず、独断ですべてを決めます。

日本はアメリカ抜きでの安全保障政策を考えなければならなくなるでしょう」という。

【トランプと石破首相の相性】

「石破首相はトランプ大統領と上手くやっけていけるのか」と不安を煽る記事が複数のメディアによって報じられている。

というのも、石破首相が初めてトランプ氏に祝辞を述べる為に電話した際、会話はたった5分で終わった。その時、トランプ氏は大統領勝利の祝賀会の最中だった為、石破首相は気を遣ったのだという。

これから長く外交を行う中で何分電話した、それほど重要ではないかもしれないが、実際に両者の性格は真逆である。

石破首相は生真面目で論理的、マイペースだが独断の判断は好まず議論を心掛け、何事も慎重で丁寧に準備して、芯を通そうとそう。

一方、トランプ氏は派手で目立ちたがりや、面倒な議論を好まないワンマンタイプで、劇場型政治を好みパフォーマンスにたけていて、政策に芯がなく選挙に勝つためのその都度世論に合わせている。

「両者の共通点がキリスト教・プロテスタントの信者であるから意外と合うのでは」という意見もあるが、トランプ氏はそれほど敬虔なクリスチャンではない。

むしろ、トランプ氏を救世主と崇める団体、「Qアノン」があるが、トランプ氏自身もひょっとしたら、「神に従う」のではなく「自身が神のような絶対的存在になりたい」と考えているのかもしれない。

トランプ氏の政策にしても、キリスト教よりユダヤシオニズムに忖度している。米国の大富豪の約30%・上院議員の約10%がユダヤ人であることから、トランプ氏以外の米国大統領たちもある程度は親ユダヤの政策をとっていたが、トランプ大統領は極端だ。大統領在任中にテルアビブにあった米国大使館をイスラム教の聖地でもあるエルサレムに移転したり、今回の大統領選中の演説で「再選されたら、ユダヤ人嫌いを排除する」という発言もした。

一方、神の元での人類平等・博愛がプロテスタントの理念だが、石破首相は議員時代に「イスラエルがガザでやっていることは国際法違反である」可能性が高く、イスラエルによって侵食されてきたガザの領土問題について「オスロ合意に立ち返るべき」と主張した。

つまり、対イスラエル・ガザの問題の考えについても、石破首相・トランプ氏

には大きな隔りがある。

しかし、だからといって、両者の関係が悪くなると決まった訳ではない。

5度目の挑戦でようやく手に入れた総理の座にかけてきた執念、苦勞を神から与えられし宿命だにとらえる石破首相の強さ、そして興味を持った物事を徹底的に調べるオタク気質の石破首相は、トランプ氏のことにも徹底的に調べるに違いない。11日の記者会見では石破首相は「トランプ氏の発言を詳細に分析する」と表明した。

石破首相は良好な日米関係を築き上げ、時間がかかっても日米地位協定をより対等なものに改定出来るのか。